

Thematic Exhibition

# Researching and Conserving Artifacts of Early Japanese Christianity, vol.2

2026年3月24日(火)～5月10日(日)

東京国立博物館 本館4室

特集

# キリシタン関係遺品の

# 保存と研究 2



16世紀以降、近世の日本でキリスト教を信仰したキリシタンにまつわる遺品には、さまざまな来歴のものがあります。東京国立博物館（以下、当館）では、長崎奉行所の宗門蔵で保管されていた関連資料を収蔵していますが、これはキリスト教禁教期（17～19世紀）に浦上を中心とする長崎各地の信徒から押収された品々や、江戸幕府の禁制政策に使用された踏絵などからなり、キリシタン信仰史を知るうえで欠かせないことから、一括して「長崎奉行所キリシタン関係資料」として重要文化財に指定されています。

なかでも、中国・福建省の徳化窯で焼成された白磁製の観音菩薩像は、当時「ハントマルヤ（聖母マリア）」として信仰を集めたとみられ、いわゆる「マリア観音」として知られます。キリシタン関係遺品には、白磁製のみならず、銅製、木製など多様な材質の観音菩薩像や、さらには道教像まで含まれており、本特集ではこれら信仰の対象とみられる彫像について、源流にあたる観音菩薩像をまじえてご紹介します。加えて、信徒が携帯したお守りである守裂の保管環境も改善を進めており、あわせてキリシタン関係遺品に対する当館の取り組みとしてご覧いただければ幸いです。

The current exhibition presents artifacts related to Christianity from Japan's early modern period. The religion was introduced to Japan in the mid-1500s, but it was outlawed at the beginning of the Edo period (1603-1868). On display here are objects from the 1500s, including those that had been stored at the Nagasaki Magistrate's Office in southern Japan. These consist of items that were confiscated from Christians in various parts of Nagasaki, as well as "stepping images" known as *fumi-e*, which were used by the Edo-period government to identify Christians for persecution.

Among these objects are glazed porcelain figures of the bodhisattva Kannon, which were made in Dehua, southern China. To escape persecution, it is believed that Japanese Christians at the time worshipped these figures as representations of the Virgin Mary. The present exhibition introduces these Kannon figures as well as other sculptures that are thought to have been objects of worship.

Also featured here are the museum's recent efforts to improve the storage conditions of Christian-related objects, which also include pieces of cloth called scapulars that Christians carried around for protection.



## 長崎奉行所 キリシタン関係資料

江戸幕府がキリスト教を禁じて以降、とりわけ長崎の信徒は長崎奉行所によって厳しい取り締まりを受け、その宗門蔵には押収された品々や、禁制政策に使用された踏絵などが保管されました。明治以降、これらは長崎県に引き継がれたものの、取り扱いに苦慮した県から国の教部省へ移管が申し出られ、内務省社寺局を経て当館に収蔵されました。

◎ 踏絵 聖母子像（ロザリオの聖母）  
Image to Trample On (*Fumi-e*): Madonna and Child  
(Madonna of the Rosary)  
江戸時代・17世紀 長崎奉行所旧蔵品 C-719

## 東アジアで信仰を集めた 観音菩薩

キリシタンから押収した観音菩薩像は、聖母マリアなどの聖像として信仰されたとみられますが、ほとんどは本来観音菩薩として造られたものです。当時、東アジアでは観音菩薩を女性の姿で表現することが好まれました。白い衣をまとう白衣観音や、くつろいで座る水月観音、子宝を願う送子観音、魚を売る女性の説話にもとづく魚籃観音はその一例です。



観音菩薩立像  
The Bodhisattva Kannon  
明～清時代・17～18世紀  
TC-464

魚籃観音菩薩立像  
The Bodhisattva Kannon  
with a Fish Basket  
中国・徳化窯  
明～清時代・17～18世紀  
横河民輔氏寄贈 TG-950



観音菩薩坐像  
The Bodhisattva Kannon  
明～清時代・17～18世紀  
松本忠蔵氏寄贈 TC-67



◎ 観音菩薩立像  
The Bodhisattva Kannon  
中国・徳化窯  
明～清時代・17世紀  
長崎奉行所旧蔵品  
(安政3年長崎奉行所に収納)  
C-603

◎ 観音菩薩坐像  
The Bodhisattva Kannon  
中国・龍泉窯  
明～清時代・17世紀  
C-1087

## ハンタマルヤ（聖母マリア）の 信仰

明から清時代（17～18世紀）にかけて白磁で盛んに造られた観音菩薩像のなかには、西洋向け輸出品リストに「Sancta Maria」と記載されるマリア像も含まれます。長崎の外海・浦上にも17世紀半ばにもたらされたとみられ、安政3年（1856）の押収時は「ハンタマルヤ（聖母マリア）」と呼ばれました。のちの禁制により、ほかの地域には伝わりませんでした。

## 白磁製観音菩薩像の科学分析 —— X線CT撮影と蛍光X線分析

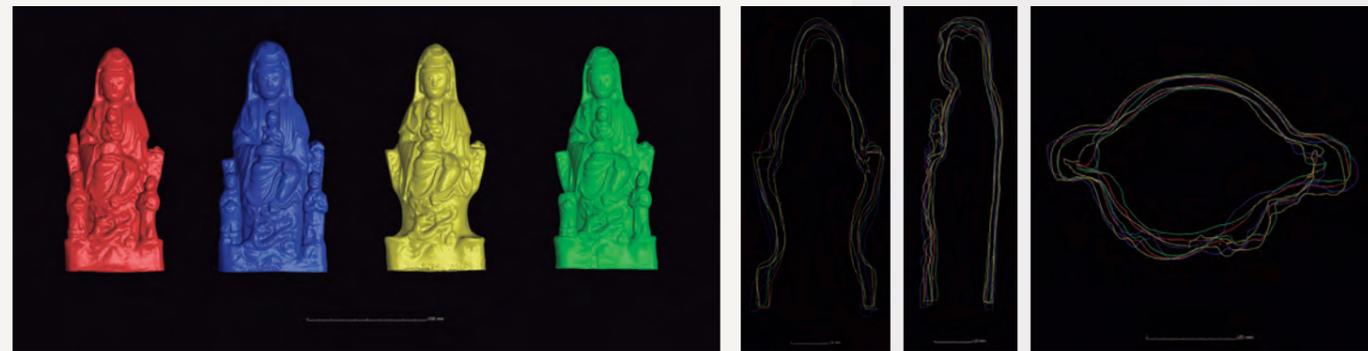


A ◎ 観音菩薩坐像 The Bodhisattva Kannon  
中国・徳化窯 明～清時代・17世紀  
長崎奉行所旧蔵品（安政3年長崎奉行所に収納）  
C-606  
B ◎ 観音菩薩坐像 The Bodhisattva Kannon  
中国・徳化窯 明～清時代・17世紀  
長崎奉行所旧蔵品（安政3年長崎奉行所に収納）  
C-607  
C ◎ 観音菩薩坐像 The Bodhisattva Kannon  
中国・徳化窯 明～清時代・17世紀  
長崎奉行所旧蔵品（安政3年長崎奉行所に収納）  
C-617  
D ◎ 観音菩薩坐像 The Bodhisattva Kannon  
中国・徳化窯 明～清時代・17世紀  
長崎奉行所旧蔵品（安政3年長崎奉行所に収納）  
C-618

中国・徳化窯で焼成されたと考えられる白磁製観音菩薩像に対して、材質技法を調査するため、X線CT撮影と蛍光X線分析を実施しました。CTでは、おおむね前後に型を用いて成形し、頭部や手首先など別製にすること、一部の像は同種の型によることがわかりました。また、肉眼でも彩色の認められる像がありますが、蛍光X線分析ではその顔料が推測できること、それとは別に金箔を施した像も確認できました。

### X線CT撮影——制作に同種の型を用いた可能性

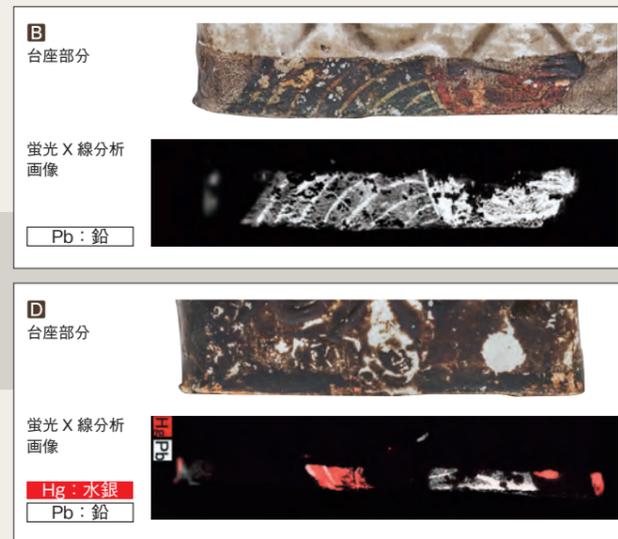
物質を透過するX線の原理を利用した科学分析の手法として、X線断層（CT）があります。CTでは立体的な3Dデータを得ることができるため、観音菩薩像4点の輪郭線を描き起こしたところ、その形状はほとんど一致しました。制作は手作業のため、数ミリの誤差はあるものの、同種の前後分割型を用いて成形し、胸に抱く子や両脇に立つ人物などを補うと考えられます。



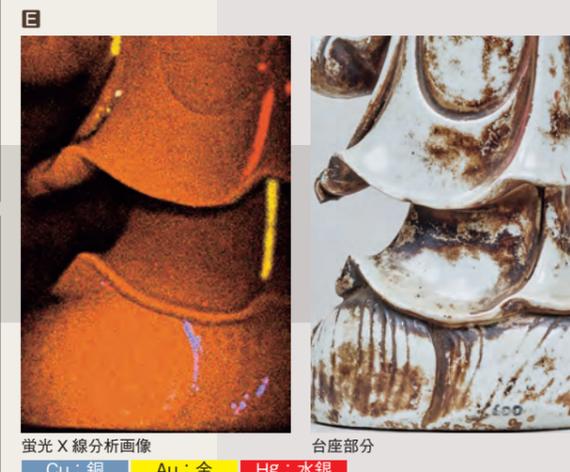
A～D 観音菩薩坐像 X線CT撮影画像（3D画像）  
同 正断面 同 側断面 同 水平断面

### 蛍光X線分析——彩色や金箔仕上げの痕跡

文化財に使用される材料の元素を特定する蛍光X線分析では、X線を照射された素材から放出される蛍光X線を測定します。BやDは、白い彩色下地や波の線描に鉛、赤い宝珠に水銀が検出されました。Eの衣からは金や水銀（朱色の下地）、台座からは緑や青を表わしたとみられる銅が検出されました。徳化窯の西洋向け白磁の一部は輸出時に彩色された可能性が指摘されており、その類品と考えられます。



B 台座部分  
蛍光X線分析画像  
Pb: 鉛  
D 台座部分  
蛍光X線分析画像  
Hg: 水銀  
Pb: 鉛



E 台座部分  
蛍光X線分析画像  
Cu: 銅 Au: 金 Hg: 水銀

E ◎ 観音菩薩立像  
The Bodhisattva Kannon  
中国・徳化窯  
明～清時代・17世紀  
長崎奉行所旧蔵品  
(安政3年長崎奉行所に収納)  
C-600



# 保存処置と保管環境の改善

## 守裂の保存環境改善

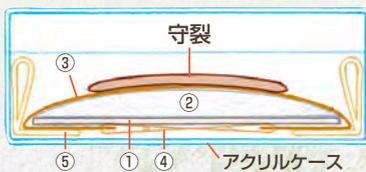
キリシタン遺品の守裂は、これまで<sup>うすようし</sup>薄葉紙に包まれ、積み重ねられて木製棚に保管されてきました。そのため、積み重ねによる負荷や、薄葉紙から作品を取り外す際の摩擦による繊維劣化が懸念されてきました。そこで、守裂の形状に合わせた二種類のクッションマウントを作製し、アクリルケースに入れて、状態観察や取り扱いがしやすい保管形態へと改善しました。マウントには各種保存に適した素材を選択し、接着剤は使用せず、縫いでマウントを作製しました。

## 使用した材料

- ①ピュアマット
- ②ポリエステル綿
- ③オーガニックコットン
- ④オーガニックコットンの糸
- ⑤綿テープ



1 マウント (小) の裏面を縫う作業



マウント (大) の構造断面図



2 完成したマウント (上が小、下が大)



3 マウントへの作品設置



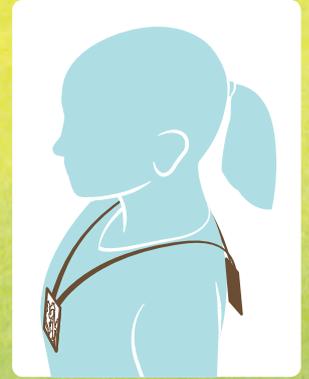
4 保存環境改善後の守裂

## 守裂 (スカプラリオ)

<sup>まもりざれ</sup>守裂は、キリシタンが所持した携帯用のお守りです。スカプラリオと呼ばれ、本来は修道服でしたが、これをもとにして信徒用に小型のお守りが作られました。布製のお守りを<sup>ひも</sup>紐でつないだ形状が一般的で、胸と背中にあたるように身につけます。守裂の意匠は聖母子が多く、守裂を手に持ち、信徒に授ける場面が好まれたようです。



◎ 守裂  
Scapular  
19世紀 C-1001-1



守裂の装着図

改善前の  
保管状況



現在の  
保管状況



[謝辞] 一部管理換えや長期貸与中の作品の調査に際し、松浦晃佑氏 (九州国立博物館)、齋藤義朗氏 (長崎県文化観光国際部) にご高配を賜りました。守裂のマウント作製は瀬戸千春氏 (外部技術者) に全面的な協力をいただきました。本特集は、JSPS 科研費 JP25K03689 の助成を受けたものです。記して感謝申し上げます。

[表紙] C-607 観音菩薩坐像

\* 作品名称の前に付した◎は重要文化財



特集 キリシタン関係遺品の保存と研究 2

令和 8 年 (2026) 3 月 23 日発行

執筆: 西木政統、野中昭美、佐藤萌 展示企画: 西木政統、野中昭美、宮田将寛、増田政史、佐藤萌  
撮影: 藤瀬雄輔ほか 翻訳: サミュエル・タン (以上、東京国立博物館) 作図: 蓬生雄司  
デザイン・制作・印刷: アイワード 編集・発行: 国立文化財機構 東京国立博物館  
©2026 東京国立博物館 Tokyo National Museum